# 「趣味」との出会いは「人」との出会い

## 本との出会い

私が、物心ついて最初に好きになったモノは「本」だった。その出会いは、私が保育園に上がる頃、現在住んでいる家に引越してきたことだった。その新しい家の隣には大きな図書館があり、自分の庭のように感じていた。たくさんの本を読みきかせをしてくれる母の影響もあり、私は自然と本を求めて図書館に通うようになった。何冊もの本に囲まれたその空間は、無限のストーリーに出会うことができ、新たな知識の宝庫でもあった。昔話や詩の絵本、創作童話や生き物図鑑。何冊か本を持ってきて、その場で読むこともあれば、気に入ったものは家に持ち帰って何度も繰り返し読んだ。

特に、私のお気に入りだったのは「じごくのそうべえ」という落語を題材とした絵本だ。

「とざい、とうざい。かるわざしのそうべえ、一世一代のかるわざでござあい」

関西弁をまじえた語り口がとても軽快で、ユーモアにあふれた地獄譚だったのを覚えている。私はこれを母に読んでもらうのも、自分で口に出して読むことも好きだった。ただ本を見るだけでも楽しかったが、読むことでその言葉の響きを口で感じることが楽しかった。この頃から私は本のある生活をしていた。

## ファンタジー児童文学

小学校に入学した私は、もちろん友達と外で遊ぶことも好きだったが、相変わらず図書館通いを続けていた。

三年生になると、女の先生が担任になった。その人は三十代くらいの男勝りな先生で、授業中ふざけている男子たちを見つけては、頭をグリグリするので、男子に恐れられていた人だったが、生徒たちへの愛が溢れた人だった。そんな先生が、ある日から学級活動の時間に本の読み聞かせをしてくれるようになった。

その本は、「たつみや章」という人の「月神の統べる森で」という本だった。これは、カムイと呼ばれる神のような存在と人間が共存する、縄文時代の日本を舞台としたファンタジー児童文学だ。分量としては、一時間の授業で読み終わるものではなく、黙読向きの本だと思う。

読み聞かせなら、小さい頃から何度もしてもらったことがある。しかし、この先生の読み聞かせは、いつも以上に登場人物たちの心情がストレートに心の中に伝わってくるものだった。カムイの宿る自然への畏敬や祈り。殺したり採集して獲た食べ物や、日常で使う道具などに対する素朴で純粋な感謝の心。共に生活する人々への愛情。そして、友を失う深い悲しみ。先生が読む登場人物たちの台詞には、そんな彼らの感情がしっかりとこもっていて、聞いていると、ぐっと本の世界に引き込まれる。このような読み聞かせを聞くのは初めてだった。私は、登場人物たち

の心情に寄り添って一喜一憂し、物語を聞きながら胸が熱くなるのを感じていた。

私は学校が終って家に帰ると、すぐに図書館へ向かった。書架で「たつみや章」の名前を見つけ、すぐさま何冊か借りて、その人の作品を読むようになった。彼女の作品には、どれも人間と自然(神)と共存しようとする世界が描かれている。私はその世界観にハマっていった。「普段は目に見えないけど、実は全てのものに神様が宿っていて、私たちを見守ってくれている」という世界に憧れていた。モノの豊かさを競い、優劣を争う。そして他者と駆け引きをする、欲にまみれた人間同士の混沌とした関係ではなく、周りの人々をただ純粋に慈しみ、助け合い、恵みをもたらす自然(神)に感謝して生きる。もちろん、こんな理想郷は物語の中だけだと分かっていたが、だからこそ私はこんな理想郷に憧れ、この方の作品に惹かれていったのだろう。

この本をきっかけに、私はファンタジーの児童文学を中心に読書をするようになっていた。今思えば、なぜ手軽に楽しめるマンガよりも、読むのに時間がかかる活字作品にはまっていったのだろう。改めて考えると、絵とセリフで物語が描かれるマンガよりも、自由に物語世界を空想できる活字の方が、やはり性に合っていたのだろう。私は「本」の世界にのめり込むことで、内なる自分の世界に没入し、普段友達や家族と会話している自分とはまた別の、内なる自分と出会ったのかもしれない。

## 心理学書物

家の隣の図書館は、一階が絵本や児童文学といった子供向けの書架、二階が小説や専門書などの一般の書架となっており、いつもは一階を利用していた。しかし、あるきっかけで私は二階を利用するようになった。

それは小学校六年生のときの誕生日。親戚に本を買ってあげると言われ、ふと手に取ったのが京極夏彦作品の巷説百物語という文庫本。表紙には、土気色の顔をした不気味な人形が横たわっている。当時、怖い話や怪談がマイブームだった私は、「百物語」という言葉に惹かれたのかもしれない。私はこの本をきっかけに、二階の書架を利用するようになったのだった。二階は私にとって大人の領域。フロアに設置された席では、黙々と本を読む人、何冊か本を並べて調べ物をしている人など、なんだか自分も少し大人になったような気分だった。

そんなある日のこと、ふらふらと専門書の書架を歩いていると、私は心理学の専門書が置いてあるコーナーで足が止まった。そこでふと目に留まったのが、「図解雑学　心理学入門」という本だった。これは、心理学における歴史や方法論、体と心の関連性や、人間の一生と心理学の関係、性格をめぐる研究などについて、やさしい文章と絵で丁寧に解説しているものだ。パラパラとページをめくり、なんとなく興味を抱いた私は、この本を借りたのだった。

その本を借りた頃の私といえば、下校時に友人の悩みや愚痴を聞くのに疲れていた。高学年からだろうか、学年が上がるにつれて、友達同士の人間関係も複雑になり、面倒な現実が露わ

になっていった。

例えば、その日の授業で課された課題を挙げては、「どうせ私なんて、全然勉強も運動もできないし…」という、諦めを含んだ自己否定。「〇〇ちゃんグループと△△ちゃんグループの間で、板ばさみになってるんだけど、どうしたらいいと思う？」という、女子間で起こる派閥争いや、駆け引きにおける悩み。

一緒に過ごしていた友人とは遊んだりもしていたが、なぜか下校のときは決まってそんな内容の話ばかり。彼女の話を適当に聞き流せば良かったと思うが、当時の私は真面目な性格からか、親身になって話を聞いていた。しかし、返ってくる言葉は必ず、「どうせ…」とか、「でも…」といったネガティブな言葉。そんな話を毎日聞いているうちに私まで暗い気分になり、家に着く頃には気分も沈んでいた。

その暗く鬱屈した気持ちは、自分が抱えている人間関係の悩みや、吐き出したい愚痴とも混ざり合い、ますます陰を落としていく。「くだらない話題に相槌を打つのは、私だって疲れるよ！　それに他人がなんで対立してるとか、正直どうでもいいよ！」

こんな感情が、ぐるぐると頭の中を回っていた。しかし、この感情を他人に吐き出せば、自分と同じように誰かが嫌な気分になってしまうかもしれない。「あーあ、なんか人間ってめんどくさいなぁ」。そんなことを考えていた矢先に出会ったのが、あの心理学の本だった。学校では教えてくれない新しい知識の連続に、私は夢中で本を読み進めていった。

だからといって、その知識を人に当てはめて理解しようと思っていた訳ではない。私には、新たな「知識」を吸収することこそが重要だった。他者と関わることに疲れていた私は、何冊か心理学の本を読み、その知識に没頭するあまり、だんだんと他者との関わりを避けるようになっていた。友人との間に居場所がなかった訳でもなく、いじめられたこともない。ただ、自分の居場所は本の持つ興味深い知識の中にあり、その知識を吸収する「内なる自分」の時間こそが最優先事項だった。

「グループの友達に気を使い、くだらない話題に相槌をうつ。その会話で何が得られる？　疲れるだけじゃないか。だったら一人で本でも読んでた方がマシだ」。

私は幼い頃から本によって得て習得した、知識がとても尊いものであり、「人」を構成しているのだと信じていたのかもしれない。知識こそが、他者から頼られる要因であり、自分の大半を構成する要素だと考えていたのだと思う。しかし、この頃の私は「内なる自分」が肥大し、知識で人間を分かったと思い込んでいる、ただの頭でっかちな人間だった。

## 日記との出会い

そんな冷めた人間のまま、私は地元の中学に進学した。中学からは、隣の地域にある小学校の子たちとも同じ学校になる。そのため、新しい友達もたくさんできたが、やはり休み時間に本を読んでいることが多かった。周りと笑っていても、どこかで感じていた負の感情。吐き出せる場所はなかった。ただ、ここで一

旦、本から少しだけ遠ざかる出来事が起こる。それは中学二年のとき、いとこの影響でジャニーズのアイドル・グループにハマったことだ。

もちろん本は大好きだったが、何でも一度ハマったら一直線。私はあっという間にジャニーズ・オタクへと変貌を遂げていた。そして今まで、「人間なんて…」と考えていた私が、彼らが掲載された雑誌や出演するラジオ、事務所運営サイトの彼らの日記から、仕事への真っ直ぐな熱意や人生観など、言葉の一つ一つに強く影響を受けるようになっていた。

今までの性格が四角四面のように堅いものだとしたら、彼らの影響で少しずつ角が削られ、性格が丸くなっていったような気がする。彼らのライブに参加するうちに、ライブの感想を残しておきたいと思うようになり、ノートにその感想を書くことを思いついた。どの曲のときにどう楽しかったか、トークの時間にどんなことを話し、それに対してどう思ったか。少し大きめのノートだったが、1ページでも2ページでもペンを走らせ、書き終えると、とてもスッキリとした気分だった。

「感想書き出すのって、結構楽しいじゃん！」。そう思った私は、それをきっかけに日記をつけるようになった。何も書くことがない日でも、意外と書くことのある自分に気付いた。今日は友達とどんなことを話したか、授業や部活で何をしたか、どんな本を読んで何を感じたか、自分の考えなど、一日の終わりに自分と向き合う時間ができた。喜びや悲しみも、どうしようもない怒りや汚い感情、それらを文章にすることによって、心の中が整理される。書いているうちに今まで気付かなかった新たな自分を発見することもあった。

日記に書かれている自分は知識でコーティングされたものではなく、個である「人」として生々しく存在する自分。日記を書く前は、感情や考えがぐるぐると渦巻き、内なる自分の中に混沌と蓄積していくだけだった。しかし、気持ちを文章にすることで、その気持ちを上手く整理し、発散できる方法を発見したのだ。感情を全て日記に吐き出すことで、自分の感情を昇華できるようになった私は、以前に比べて物事を楽に考えられるようになっていた。

## プリクラ帳との出会い

同じ頃、私はプリクラ帳を作り始めた。当時、クラスの女子の間でプリクラ帳を作って見せ合うのが流行っており、私もその流行りに影響されていた。友達と撮ったプリクラをノートに貼り、ペンやシールを使ってデコレーションをしていく。また、好きなアーティストの歌詞を書いたりと、自分の好きなようにこだわって作った。元々、絵を描くことや広告のチラシを切り抜き、コラージュして遊ぶことが好きだった私は、新しい遊びを見つけたとばかりに、このプリクラ帳作りに夢中になっていった。

友達とプリクラ帳を見せ合ったときに、「すごいね！　上手！」と言われることが嬉しかった。「次はどんなページにしようかな」と、暇さえあればネタを考え、素材になりそうなチラシを集めたりしていた。

私はプリクラ帳の中に自己を表現し、友達に見せることで自分を解放した。そうすることで、他者に自分を開示する方法を習得したのだ。これを始めたことで少しずつ、自分が在りたいと願う居場所が、自分の中から他者の中へと移り変わっていった。

## 高校入学で逆戻り

その後、私は慣れ親しんだ地元の中学を卒業し、高校は遠く離れた女子高へと進学した。そこは幼稚園から大学まで一貫教育を行っているおり、新たに進学してくる人たちは、元からこの学校にいる生徒たちと共に、三年間過ごすことになる。新しい環境や電車通学、そしてはじめて見る大人びた同級生たちに、入学式当日の私はとても緊張していた。

「一体どんな子たちがいるのだろう。クラスにも馴染めるといいな」。そんな私の緊張をよそに、クラスの子たちは、よく笑い、よくしゃべる、とても良い子たちだった。ここでもグループのようなものはあったが、私が女子高と聞いてイメージしていたネチネチとした人間関係はなく、むしろサバサバとしていた。ファッション誌を片手にメイクの話をしているギャル系の子や、席で文庫本を読んでいる大人しい子など、様々なタイプの子が共存し、和やかな雰囲気が漂っていた。

徐々に、私にも一緒にご飯を食べるメンバーができ、互いに挨拶をするような友達ができたが、明るく和やかなクラスの雰囲気を感じれば感じるほど、なぜか自分がひとりであるように感じ、クラスにいることが苦痛に思えていった。新しい環境でストレスもあったのだろうが、次第に自ら友達との間に壁を作り、休み時間は一人で本を読んだりして過ごすようになった。

やがて、私は少し転機を迎えた。それは、入学から少し経ち文化祭の準備をするようになった頃だ。私は、同じ準備グループの子と話をするうちに、その子と趣味の話をするようになっていた。

「〇〇ちゃんは何が好きなの。私はジャニーズの△△っていうグループが好きなんだ」

「私は宝塚の舞台をよく見に行くの。ねぇ、ファンクラブのチケット制度とかってどうなってる」

最初はグループの相違点などいろいろと話していた。そういった話をするうちに、お互いに趣味を共有し合うようになり、とても仲良くなった。そして、この友人を通じてまた他にも友達ができ、文化祭をする頃にはすっかりクラスの雰囲気に馴染むことができていた。この子がいなければ、閉鎖的な自分から中々抜け出せずにいたかもしれない。

## 合唱部入部

学校生活が始まってすこしたった頃、私は合唱部へ入部した。元々、音楽や歌うことが好きということもあったが、合唱部でありながらミュージカルも行うという点に私はとても魅力を感じていた。部活見学の際に流れていた定期演奏会の映像では、華やかな衣装をまとい、中学一年生から高校三年生までが

堂々と役を演じ、曲を歌い上げている。「自分もこんな風に歌えるようになれるかな…」。そうして毎日部活に励んだが、やはりここでも私は周りとの壁を作ってしまい、ここでも教室と同じような状況に陥っていた。

しかし、練習はとても楽しかった。お腹から声を出し、各パートの歌声を重ね合わせたハーモニー。音程が下がりがちだった私は、必死に頬を上げることを意識して練習に臨んだのを覚えている。そうして、何度も調整を重ねて生まれた美しいハーモニーは、とても素晴らしいものだった。

夏休みには、冬の定期演奏会に向けて、ミュージカルの練習が始まった。そのオーディションでは、歌唱力と演技力が試され、配役がなされていった。このとき、私は役名こそないが、少し長めの台詞が一言ある役をもらい、台本の台詞の所にマーカーを引きながら、部活の中に自分の居場所が生まれたように感じて嬉しかった。

舞台上では歌うだけでなく、体を動かし役を演ずることが求められる。何度も稽古を重ねてできるようになっていくと、表現することが快感へと繋がっていった。そして、積極的に舞台とかかわろうと、やる気が沸いてくるのだ。馴染めずにいた同級生たちとも、そういった練習の中で舞台について話し合い、一緒に帰って話をするうち、徐々に壁が溶けていくように感じていた。

月日は流れ、はじめて迎えた定期演奏会当日。幕が開き、客席を埋める多くの人たちを目の前にして、私の緊張と不安は最高潮。しかし、今までの練習を思い出し、「成功させるぞ！」というモチベーションが高まり、良い緊張感の中で第一部の合唱を終えることができた。すぐさま第二部ミュージカル開演。コーラスにも一言の台詞にも、今まで自分が培ってきた全てを込めて声を発した。慌ただしいまま、舞台は最終のカーテンコールにさしかかり、「ありがとうございました！」と、部員全員でこの言葉を発したときの、何ものにも変えがたい達成感は、今まで体験したことの無いものだった。それと同時に、馴染めずにいた同級生たちとの関係が思い出された。問題が起こった時期もあった、長い時間もかかった。でも、ゆっくりと育んできた分、いつの間にかそれは仲間への強い信頼となって私の中に存在していた。

定期演奏会も終わり、私はあっという間に二年生になった。部活では先輩たちから、さまざまなことを任されるようなり、ミュージカルにおいても、ソロや台詞のある役をもらうようになった。その役が主人公の父親だったからか、私には「パパ」というあだ名がつき、廊下や教室でも、部活の仲間からパパとよく呼ばれていた。そんな事情も知らない同級生たちの前で時には大声でパパと呼ばれ、ちょっと恥ずかしかったが、周りに自分の存在を認めてもらっている、部活の中に自分の居場所ができたように感じてなんだか嬉しくもあった。

## ミュージカル観劇との出会い

ある日、友達と一緒にミュージカルを観に行った。「ミュージカル」という存在は知っているしが、私はこのときはじめて実際の劇

場に足を踏み入れたのだった。
　物語の世界観に基づいて作りこまれた豪華なセット。カラフルで存在感のあるメイクに衣装、そして役者。セリフのある、なしに関係なく、役者を見てもしっかりと役を生きていて、迫力のある歌やダンスによって物語を紡いでいく。その迫力は、遠くから見ていてもひしひしと伝わってきて、舞台が終わる頃にはすっかり魅了されていた。
「なんで今までこんなに素晴らしいものを見てこなかったんだろう！」
　さらに私は、この舞台に出演していた一人の若手役者が気になるようになり、その役者が東京で舞台があると分かると、チケットを取り、遠征するようになった。ジャニーズのときも同じようなことはしていたが、あの頃はチケットの手続きや、移動手段を誰かに頼っていた。しかし、このときの私は、全て自分で行うようになり、一人で東京にも足を運んでいた。後に設立されるファンクラブにも入会し、そこで開催されるファンイベントに参加することで、何人かのファン友達をつくることもできた。
「どちらからいらっしゃったんですか」と話しかけて知り合いになった人もいれば、その人を通じて友達になった人もいる。みんな住んでいる場所や年齢もさまざまだ。しかし、趣味や気が合えばそんなものは関係ないのだと強く感じた。
　最近では、大きな劇場で行われるミュージカルや、ひいきの役者が出演する舞台だけでなく、小劇場の演劇まで幅広く見に行くようになり、ますますのめり込んでいる。
　舞台にハマったことで、好きなものに対して積極的に行動していけるように変化した。さらに、行動した先で出会った人と知り合い、その人たちの話に触れ、共通の趣味の話や、社会の先輩から厳しい話を聞くこともある。「ミュージカル」と出会ったことで舞台の魅力を知り、その魅力に集う人々に出会い、その人たちとかかわる中で己を見つめ、新たに発見していった。

## 古着との出会い

　私は大学に入学し、自由な私服での生活が始まったが、毎日服装を考えるのがとても面倒だった。中高は、ほとんど制服で生活しており、休日に私服をきても、以前と服が重ならないようにするだけで、簡単だ。また、他者に私服を見られる機会も少ないため、あまり気にかけていなかった。
　しかし大学では、毎日、「私服の自分」にたいして視線がむけられる。服装は、どんな自分でありたいか、どんな風に見られたいかという、自分の理想・イメージが体現できるものだと思っている。だが、この頃の私はそのイメージが持てていなかった。
　女子大生のファッションというと、non-no や CanCam に載っているような感じの服を着て、髪型やメイクもばっちり！ というステレオ・イメージをもっていて、「自分もそんなふうにした方がいいのかな」と思っていた。しかし、はじめて同級生の子たちを見たとき、いかにも女子大生らしい雰囲気の子や、おしゃれだなと感じた子もいたが、カジュアルでラフな格好の子も多かったので、「そこまで気にしなくても大丈夫なんだな」と思ったのを覚えて

いる。

おしゃれに興味がなかった訳ではない。一応ファッション誌を読み、自分なりに好きな服装を模索していたが、母が気に入るような服を着てみたり、なんとなく無難な服を買ったりと、ピンと来るような洋服に出会えていなかったのだ。この、「なんとなく」という感じは、学校生活にも表れていて、希望の学科に入ったはずなのに、新しい友達を作ろうという意欲も、これといって学ぶ意欲も涌かず、授業もなんとなく選んで受けていた。

そんな大学生活を送っていたある休日、私は洋服を買いに母と出かけた。いつもは決まった店を巡って終わりだが、この日は買いたい服が見つからない。すると母が、「たまにはちょっと違う所まで足を伸ばしてみる？」と提案してくれた。そこで私は以前、雑誌で特集されて気になっていた「古着」を扱うお店がある商店街へ行ってみることにした。古着と言えば、自分の中で組み合わせるのが難しいというイメージから、商品を見るだけで敬遠していた。

「せっかく来たし、何か良いものがあればいいなぁ」と思い、商店街に足を踏み入れた矢先に見つけたのが、ヴィンテージ古着のお店だった。その店頭に展示された古着を見た瞬間、私は視界が開けるような衝撃を受けた。鮮やかさ色合いと派手な柄、舞台衣装のような奇抜なデザイン。その服は細部に亘って主役級の存在感を放っており、「私は私！」と自信満々に主張しているようなものばかり。

「こんな素敵な服を着て過ごしたら、自分に自信が持てるかもしれない。気分も上がって大学生活が楽しくなるかも！」。私は一気にヴィンテージ古着の虜となり、服を買うときは決まってそのお店へ通うようになった。すると、「お久しぶりです」と店員さんと顔なじみになり、会話をするようになった。もちろん店員さんは、商売だから自分と話してくれるかもしれないが、やはり新たな人と出会って話すのは新鮮で面白い。さらには、店員さんを通じてお客さんと知り合いになることもあり、その思いがけない出会いの連鎖が私にはとても面白かった。

大学生活でも古着を着るようになってから、なんだか積極的に学校生活が送れるようになった。嘘みたいな話だが、同じ授業の中で新しい友達ができ始めたのもこの頃だ。確かこのときも、高校のときと同じように趣味を共有できる友達ができたことで、自分を認めてくれる友達ができた。居場所ができたことで、「様々な出来事を経てきた自分」という存在に気づき、「これが私なんだ」と自分自身を認めることができた。すると、自ずと自分の心の内が素直になっていき、やりたいことや興味が明確になり、それに向かって突き進んでいけるようになった。

私は無意識の内に、確固たる存在感を持つ洋服をまとうことで、自分の自信のなさを補おうとしたのかもしれない。自分を装うことで、自分に力を与え、内面をも変えることができる。そんな古着は私にとって、自分を行動的にしてくれる魔法のアイテムなのだ。

## 趣味との出会いとは

趣味である、「モノ・コト」との出会いは、内なる自分を発見させ、自己の内面と向き合わせてくれるものだ。しかし、その「モノ・コト」と出会う場面には、必ず他者がかかわっているし、その他者の中にどこか居場所を求めている自分を垣間見ることができた。

趣味は、自分の人生に一体どんな役割を果たしているのか。それは、他者を導き自己のアイデンティティーを気付かせ、自分で自分自身を認めさせるきっかけをくれるものだった。もしかしたら、自分に自信も持てず、あるがまま素直に表現する勇気もなく、知識で固めていた私が他者に認めてもらいたいと渇望した結果が、趣味を追求することに至ったのかもしれない。私はこれらの出会いに心から感謝している。そして、私はこれからも人との出会いを求め、きっと自己を輝かせる趣味を追及していくだろう。